

## ■ラフマニノフ／ピアノ協奏曲 第2番 八短調 Op.18

ラフマニノフの肖像写真をみると、まっすぐ見据えるようなまなざしとクールな表情が印象的だが、どこそこ不思議な雰囲気漂っている。よく見ると、ピアノを弾いているすがたも、頬杖をついている様子も、手のバランスが異様だ。背丈も高かったというが、大きな手については病気の症状だったと考えられている。1オクターブと5度、つまりドから1オクターブ上のソまで片手で弾くことができたというから、驚異的だ。

ピアノ協奏曲第2番にはこの大きな手ならではの楽想があって演奏がむずかしい。たとえば第1楽章の冒頭は、鐘の音を模した、ピアノによる和音の強打で始まる。ここは10度の和音をがっしりとつかまなければならぬので、手の小さいピアニストは分散和音にして弾く。初演でピアノを弾いた作曲家はこの手で余裕をもって迫力ある響きをたたき出したことだろう。

1897年、交響曲第1番の初演が大失敗に終わった後、4年の時を経て初演されたこの協奏曲は、作曲家としての名誉回復に一役かった。ラフマニノフはこの数年間、オペラ指揮者としての活動に集中する。精神疾患を患っていたというエピソードも残っているが、じつはピアニストとしての活躍はめざましく、音楽家としては充実した日々をすごしながら、新たな作品発表の機会を待っていたとも考えられている。ラフマニノフ自身がピアノを弾き、アレクサンドル・ジロティが指揮した初演は大成功をおさめ、その後、創作の筆もすらすらと進み、作風も成熟していく。波が寄せては返すように感情の高まりと弛緩によって構成していく独自の論理をもって綿密な構造を作りあげ、ひとつの気分がずっと持続するメロディ書法と、ワーグナーやマーラーにも匹敵する半音階を用いた和声法を駆使したラフマニノフの作品は、ロシア・ロマン派の最後の輝かしい頂点を築くのである。

全3楽章にわたってほの暗い抒情に満ち溢れている。ピアノによる和音の強打で始まる第1楽章モデラートはソナタ形式。弦楽器によって導入される第1主題は重々しいバスに支えられている。ピアノが奏でる第2主題は甘くうっとりするような楽想である。第2楽章アダージョ・ソステヌートは弱音器をつけた弦楽器が奏でる三部形式の緩徐楽章。コラール風の序奏はチャイコフスキーの影響を感じさせる。中間部はほとんどピアノによって華やかな音楽が展開する。第3楽章アレグロ・スケルツァンドはきりっとしたリズムミミックな主題と、大河を思わせる感傷的なメロディが交代する自由なロンド形式。鍵盤の上を低い方から高い方まで駆け巡るカデンツァは華麗そのもの。クライマックスはかけめぐるような走句を用いながら、トゥッティで強烈な一打を発して終わる。

白石 美雪

### 《楽器編成》

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、バスドラム、シンバル、弦五部、独奏ピアノ

※スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。